

立命館大学生存学研究所 書庫見学記*

石井保志

共立女子大学非常勤・東京学芸大学非常勤講師。専門は図書館情報学および医療福祉学。2004年から市民グループ健康情報棚プロジェクトを主宰。代表として、患者・家族への情報提供の開始。単著に『闘病記文庫入門』（2011）、分担執筆に『からだといのちに出会うブックガイド』（2008）、『からだと病気の情報をさがす・届ける』（2005）がある。

* 編集部注：石井保志さんから頂いた見学記が、書庫について大変わかりやすく関心を引きやすい内容であったことから、研究所執行部から生存学研究所 HP に掲載することを依頼し快諾いただいたものがこの原稿となっています。

訪問日時：2025年3月14日(金)13:30~15:05

ご対応：後藤基行先生、岩田京子先生

1. 当事者性のある資料の宝庫

以前から、当事者性に関する資料を所蔵するメッカは、日本に3箇所あると考えていた。1つ目は、患者団体・障害者団体の資料を収集する東京都障害者福祉会館図書室、2つ目はセルフ・ヘルプ・グループを研究するI先生の研究室、そして3つ目が立命館大学生存学研究所書庫である。3箇所のうちのひとつ、立命館大学生存学研究所の後藤先生にご依頼して、はじめて同研究所の書庫を見学させていただいた。1時間ご案内いただく予定が、30分以上超過して滞在させていただいてしまうほど、とても魅力的な所蔵資料を拝見したので、簡単な備忘録を記しておく。

2. 所蔵資料の特徴

書庫には1950年（昭和25年）以降の発行資料を所蔵。書架全体を拝見すると、闘病記がかなりあることがわかった。所蔵資料の範囲は、広すぎず専門に深く入りすぎない。「生存学」という領域なのだろうか。主なテーマは、医学看護、健康、医療・福祉、障害、病い、当事者性、市民患者活動、生命倫理等の主題領域。資料種別では、単行書、学術雑誌、専門主題雑誌、一般総合誌、報告書、会議資料などが概算で2万点以上はありそうだった。患者障害者団体の機関紙もこの書庫の貴重な資料であるが、欠号が少ない模様。患者障害者団体のニュースレター等は、一般には流通して

いない資料もあり、創刊号は当該団体の初期会員しか持っていない場合もある。当該団体の活動低下・解散等により、散逸しやすい資料が丁寧にファイリングされている。

3. 配架の特徴

こちらの書庫の単行書の配列は、出版年別に配架してあり、発行年も見出しあり年代別の収集資料を概観することができる。そして、分類ラベルが貼付されておらず、背表紙が良く見える。標題紙に丸い所蔵印のみが押印されているようだ。通常、図書館等で背表紙に貼られているラベル等がまったくないため、単行書の書名・著者・出版社名が隠れて見えないということがない。カバーもそのまま。出版社にとっては、背表紙の情報は読者に手に取ってもらうための重要な情報源である。本のカバー（ジャケット）や腰巻には当該図書を手に取るか否かの判断情報も満載である。大学図書館では、装丁に労力をかけないようカバーを剥がして配架するが多い。このことから、背表紙がまるまる見える状態で書架をブラウジングできることは貴重な環境と言える。そして、出版年毎に見出しがあり、年代順に配列されていることから、書架への出し入れがシンプルで、奥付の発行年を頼りに元の書架に戻すことが可能となっている。

4. 展望

今回、ご案内いただいた見学を通して、この書庫の大きな特徴は次の3つであると感じた。

- (1) 所蔵資料のテーマ範囲（広すぎず、狭すぎ、多様な隣接領域が収集されていた）。
- (2) 背表紙を最大の情報源として見せる書架（インスピレーションを受けやすい）。
- (3) 出版年別の配列（出版年別の配架場所を本籍地として、様々なテーマの資料を離合集散できる環境があり、多くのミニテーマを設定し、資料群の中から関連資料をピックアップして資料を組み合わせ「テーマ別」の書架を出現させやすい）。

5. まとめ

書名は図書の内容を、端的に表現している場合が多い。しかし、図書の書名はかならずしもその図書の主題をあらわしているとは限らない。1冊の図書として出版には程遠い、まだ言葉がつけられていない社会課題が、その図書の1章または一部、または1行が記されているかもしれない。1冊の図書の中でも章立てや小見出しが目次に不記載の場合もある。類義語や抽象的な記述にあるかもしれないし、目次や索引が未整備であったりする。すると、テーマを拾い上げていくのは書庫利用者の感性や抽出力なのかもしれない。

私見ではあるが、「生存学研究所書庫」の特徴は3つに集約されているように感じた

- (1) 出版年別の配架
- (2) 図書の背表紙情報の豊富さ

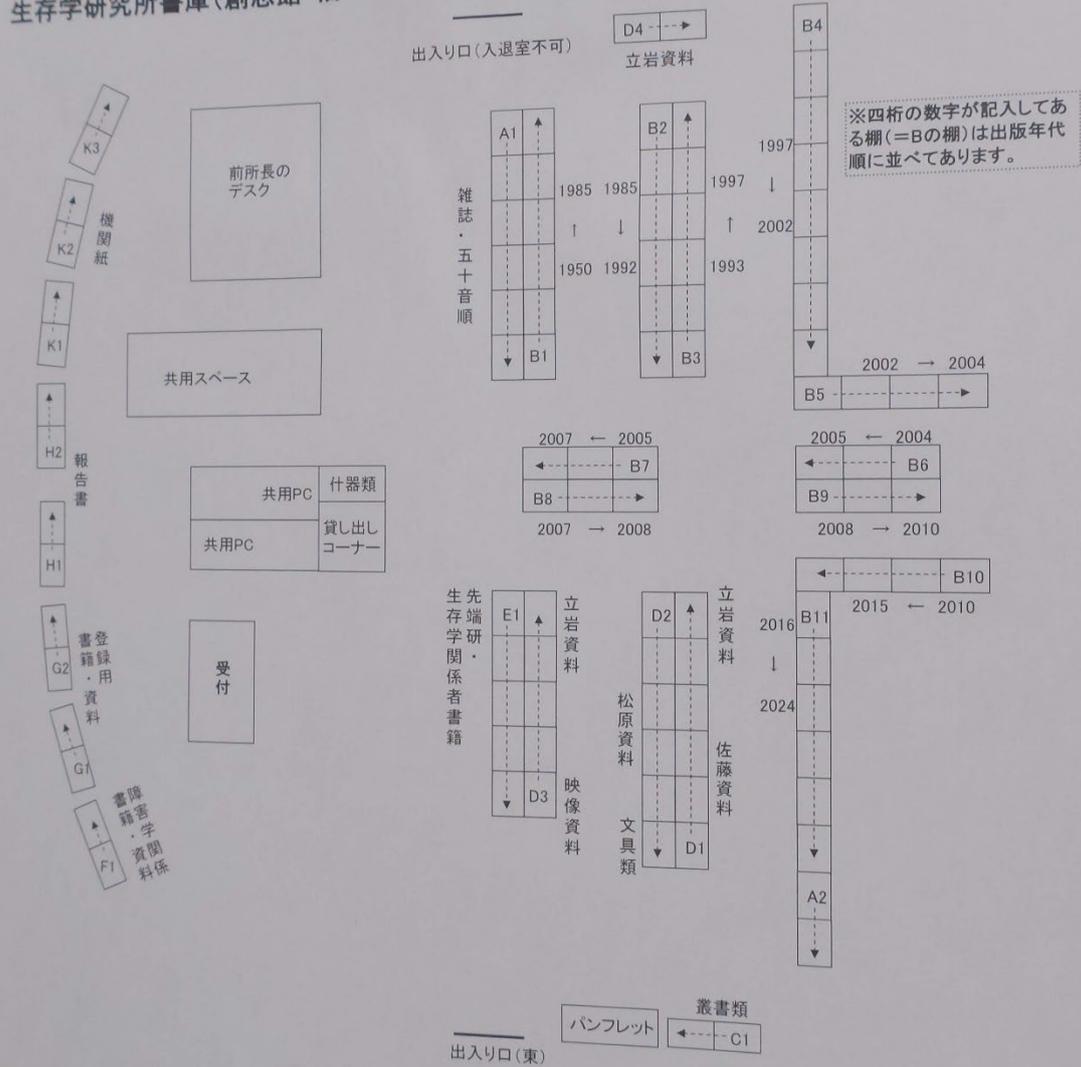
(3) 医学看護、医療福祉、当事者性、市民患者活動、生命倫理等が統合された主題

領域の蔵書群

上記3つの環境下は大変恵まれており、広すぎず狭すぎない約2万点の資料から、まだ社会課題として潜在化していないテーマを無数に拾い上げる仕組みがある書庫という印象を受けた。その仕組みを少し後押しする仕掛けがあるとすると、資料を組み合わせる「見える化」にあるような気がする。出版年別の配架を基本として、各書架から一時的に図書を借り、即席のテーマ書架を作ることである。ビジュアル化により、思考が限定されるデメリットもある。しかし、ピックアップする研究者の個性が反映される書架が出現し、消えて元の書架に戻っていく過程は、何かしらのインスピレーションを受けるのではないか。私自身は書庫内を歩かせていただいたことで、様々なテーマで「ひと棚」が山ほどできるインスピレーションを受けたことから、大変魅力的な蔵書であると思った。

今回、ご案内くださった後藤先生、岩田先生、そして研究所の皆様にお礼申し上げます。

生存学研究所書庫(創思館・旧416)書架配置図



書庫の全体図。とても良いレイアウトで、書架と書架の間隔が狭くなく、下段まで背表紙を眺めることができる。

* 編集部注：書架と書架の間隔が広いのは車いすユーザーも通れるようにするため



書籍の棚は出版年別に配列されている。オレンジ色の棚見出しが大きく、出版年の「かたまり」を認識しやすい。また、書架間の通路が充分確保されていて下段も問題なくブラウジングすることができる。書架から少し後退することで、下段の資料も活かしている。

